

グローバルCOEプログラム「コンフリクトの人文国際研究教育拠点」

「シオニズムの考古学：現代ユダヤ社会におけるディアスポラとイスラエルの相克」 第一回公開ワークショップ

<報告1>

帝国における自己呈示—ロシア・シオニズムの「想像の文脈」におけるネーションとナショナリズム

東京大学大学院相関社会科学博士後期課程

鶴見太郎

<要旨>

本発表は、シオニズムの母体となっていたロシア帝国のシオニズムのうち、ロシア語公共媒体における議論を素材に、シオニズム思想を歴史社会的に分析するものである。時期は1881-82年ポグロムからロシア帝国崩壊（1917年）を中心に据える。理論的にはE・ゴッフマンの社会学理論を念頭に置きながら、当時の当該社会の文脈にあったシオニズムにおいてネーション概念やナショナリズムがなぜ、どのように、いかなる意味を持つようになったのかを検証していく。本発表は、翻って、ロシア革命の前史として見られることの多い1905年革命以降の時期において、政治・社会思想や秩序観などに関して様々な可能性が併走していたこと、そしてその中でシオニズムがどのような関わりを持っていたのかを提示するものでもある。また、こうした経験がシオニストのパレスチナ／アラブ認識にいかに関連するのかという点も、示唆にとどまるが、考察する。

<報告2>

19世紀末から1948年に至るアメリカ・シオニスト運動の展開—アジェンダ生成・確定をめぐる権力過程としての「アメリカ」と「パレスチナ問題形成」

関西大学非常勤講師

京都大学地域研究統合情報センター研究員

池田有日子

<要旨>

本発表の目的は、アメリカ・シオニスト運動を対象として、「ユダヤ人」や「アメリカ」-「パレスチナ問題」にまつわるいくつかの「自明性」の形成のされ方を検証することにある。つまり、ユダヤ難民問題とパレスチナ・ユダヤ人国家のリンケージの「自明性」の形成のされ方、アメリカ・ユダヤ人のパレスチナ・ユダヤ人国家への支持という「自明性」の形成のされ方、「ユダヤ民族」「ユダヤ・ネーション」の「自明性」、内実の形成という問題である。このように「自明性」という問題に着目することによって、必ずしも必然性のなかった何か「自明」とされることで、ある事態が生じること、とりわけ何か捨象され不可視化されていく側面を照射したいと考えている。より具体的にいえば、「ユダヤ難民問題」と「パレスチナ・ユダヤ人国家」がリンケージされることによって、パレスチナ・アラブ人の法的・政治的権利という問題が捨象、軽視されていく点を問題としており、それはアメリカ・ユダヤ人がユダヤ人国家を支持しているという「自明性」が形成されたことを前提としていたと捉えている。さらに、「ユダヤ民族」「ユダヤ・ネーション」の自明化や内実の問題を扱うことで、「国民国家」という問題についても考察を行いたいと思っている。以上の観点を前提として、本発表では「アジェンダ生成・確定に関する権力過程」として「アメリカ」と「パレスチナ問題の形成」を捉え、いわば系譜学的に検討することとする。

日時：2008年7月27日（日）15:00-18:00

会場：大阪大学大学院人間科学研究科（吹田キャンパス）東館1階105講義室

*大阪大学大学院人間科学研究科（吹田キャンパス）への交通アクセスは<http://www.hus.osaka-u.ac.jp>をご参照ください。

お問い合わせ先：赤尾光春（大阪大学人間科学研究科特任助教）

e-mail: royterek@hus.osaka-u.ac.jp tel: 06-6879-4046

【報告者略歴は裏面をご参照ください】

【報告者略歴】

鶴見太郎（つるみ たろう）

東京大学大学院 総合文化研究科 国際社会科学専攻 相関社会科学分野 博士後期課程在籍（日本学術振興会特別研究員DC）。歴史社会学やエスニシティ・ナショナリズム論などの視点から、ユダヤ近現代史とりわけロシア帝国下におけるユダヤ社会・シオニズムに関する研究を行っている。主な業績は、"Was the East Less Rational than the West? The Meaning of 'Nation' for Russian Zionism in Its 'Imagined Context'," *Nationalism and Ethnic Politics*, 14(3), 2008 (forthcoming)、"シオニズムをめぐるオリエンタリズムとアンチ/カウンター・オリエンタリズム—抜け落ちる「ロシア」—"『相関社会科学』16(2007)、"ロシア帝国とシオニズム—「参入のための退出」、その社会学的考察"『スラヴ研究』54(2007)など。

池田有日子（いけだ ゆかこ）

関西大学非常勤講師、京都大学地域研究統合情報センター研究員。19世紀末から1948年に至るアメリカのシオニスト運動の分析を通じて、国民国家にまつわるアイデンティティの諸相や西洋の政治的な理念や国民国家を中心とする政治的枠組みの検討を行っている。主な業績は、「ルイス・ブランダイスにみる「国民国家」「民主主義」「パレスチナ問題」」（日本政治学会編『年報政治学 2007-2 包摂と排除の政治学—越境、アイデンティティ、そして希望』、木鐸社(2007)、「アメリカにおけるシオニズムの論理—ルイス・ブランダイスに関する考察を通じて—」『政治研究』第51号(2004)、「アメリカ・シオニスト運動と「パレスチナ・アラブ人問題」—ビルトモア会議を中心として—」『政治研究』第48号(2001)など。